

環境プロジェクト第3回会合 議事要旨

日時： 平成13年5月 22 日(火)

17 時～20 時

場所： 中央合同庁舎第4号館 220 会議室

出席者：総合科学技術会議議員：吉川弘之（プロジェクトリーダー） 石井紫郎

重点分野推進戦略専門調査会専門委員： 秋元勇巳 茅 陽一

招聘者：市川惇信 植田和弘 河野昭一 北野 大 小池勲夫

佐々木恵彦 寺門良二 仲村巖 西岡秀三 松野太郎

御園生 誠 宮本純之 和田英太郎

事務局：浦嶋将年 渡邊 信 山口佳和

1. 環境分野における推進戦略(骨子案)について

資料1～2、参考資料1～4について事務局より説明。

【佐々木】 1 ページ目に地球環境研究と循環型社会構築研究と有害化学物質、自然共生と4つ並んでいる。地球環境研究には、他の3つが全部おさまる。地球環境変動研究とかを入れたほうがいい。

【茅】 1枚目の基本は、よろしいと思う。ネーミングについては、重点項目のところに4つ書いてあるが、これは今まで官庁で使われてきた研究分類の名前なのか？ というのは、2番目と4番目が社会構築研究。片方は循環型社会で、片方は自然共生型社会というと、何か対立的に見える。自然共生型社会というのは、自然共生へ向けての研究であり、名前を変えた方がよい。

それから対策研究というイメージが非常に強い。環境の場合に一番大事なものは、まずは観測。よくわかっていないということのためにいろいろな問題が生じているので、やはりベースになる観測という言葉をどこかに入れるべき。

重点化の考え方の に、最終的に実用化などの研究開発目的を達成することが十分可能であること。厳密に言えば、観測も、機器の実用化という意味ではここに入る。これだと対策技術的に聞こえるので、言葉を工夫して、観測といったふうな、本来の環境についての重要な技術をどこかに入れるべき。

【秋元】 重点となる項目が4つであるならば、この下の4つの例示のネーミングをきちっとした上で、これを上に出すほうがいい。例えば、化学物質の場合だと、有害化学物質研究と化学物質総合管理プログラムのふたつが書かれているが、このふたつでは化学物質総合管理プログラムのほうが内容的に大きい。

もう一つは、都市再生本部のプロジェクトと連携をする必要があると備考に明記されているが、実は茅先生主宰のエネルギープロジェクトの中で特に地球環境関係の研究とかなり重なる部分があり、特にエネルギーの開発のテーマと、この環境の問題については密接な関連があるので、ここの連携が必要ということも明示しておいていただけたほうがいい。

【宮本】 1点目は、有害化学物質研究というのは、いろいろな意味でちょっと問題がある。私は、この間、安全化学物質を考えるんだと言った。有害化学物質のリスクをどう評価し、それを削減するかということだが、究極のねらいは、より安全な化学物質をつくっていかうということである。この言葉はぜひとも変えていただきたい。

2点目は、重点化の考え方とか重点となるべき領域・項目というところにプログラムという名前が出てくる。これは少し限定的に受けとられるおそれがあるので、やはりイニシアティブという言葉のほうがいい。このイニシアティブがあって具体的なプログラムが出てくる。こういうふうに言葉の使い分けをしていただいたほうがいい。

シナリオドリブンという言い方は非常にいいが、シナリオ駆動型という日本語はちょっと難しい。

【小池】 地球環境研究には、変動を入れたほうがいい。その上の4つに対して、先ほどから出ている下の4つの例のプログラムというのが、どうもしっくり来ない。

例えば、地球環境変動研究というのは、観測、モニタリング、プロセス研究、モデリング、対策が一連のものとしてある。例を出すと、それにみんな引っ張られてしまう。上の4つの研究の概念をはっきりさせれば、それで十分だ。

【松野】 政策のための研究に重点を置いているように聞こえてしまう。

環境の問題が社会的に大きな問題になっているのは、国民の一人一人が地球の状況が心配だから知りたいということがあって、それに対して答えるというのが研究・科学の第1の役割。そういう点を重点化の考え方の中に取り込んでいただきたい。

地球環境というのは地球環境変動と言ったほうがいい。

地球温暖化防止プログラムについては、防ぐことが可能なような前提に立っているが、実際問題として、ある程度の温暖化は避けられないので、何か言葉は変えられないか。私自身は、前から管理温暖化という言い方をしている。一方においてCO₂の排出量を制圧しながら、それを予測して、いつも地球全体をモニターしながら、危機が来ないように、かつその対応もしていくと。

【河野】 野生生物の遺伝子源とか遺伝子多様性が急速に減少しているという事実があり、そういう視点をどこかに据えていただきたい。

【和田】 自然共生型社会構築研究については、人文系の人と理系の人とがボトムアップ的に話し合っ、まずどういう科学技術が必要かということからはじめることが必要だ。

【植田】 サステナビリティとディベロップメントの矛盾という根本問題に突き当たっている。その根本問題をどう社会として解決するかが、根本のところでは問われている。ディベロップメントとサステナビリティを独自に扱うようなプログラムあるいはイニシアティブが重要。

国際的な次元で議論してもよいし、研究のプロジェクト自体としては、流域圏とか都市という空間で扱って、サステナビリティとディベロップメントの問題を扱うこともできる。主体の問題として、ライフスタイルのあり方、参加、パートナーシップの構築といった、社会実験的な研究もある。

【御園生】 研究の実施の仕方とか体制等について指摘するべき。もう一つは、予防的な研究を化学物質に書き加えるとよい。

【西岡】 1点目は標準物質、計測技術等々について。宇宙観測、情報データベースの整備等を含めて知的基盤として考えるべき。2点目は体制について。設計段階での統合イニシアティブをつくる本部的な機能、それを確実に執行、モニタリングする実施機関等も。

【仲村】 具体的なプログラムで、目標値、時間をはっきりさせ、効率的に統合的に進めるのは非常にいい。それをどんな形でやっていくのかを次のステップで明らかにする必要。

化学物質の影響について、人体に対する影響の研究がおくれている。人間集団に重点化していくのがいい。

【寺門】 地球環境の研究の中で、地球温暖化を今回は重点的に取り出した。循環型社会の構築プログラムは、少なくとも国内全体の中の物質循環というものを目指す。自然共生は、密度の高い地域の再生プログラム。化学物質は、重点化のイメージが浮かび上がらない。

標準物質等については、計測を戦略的に行うことが重要。

【石井】 重点化というのは、要するに絞り込み。だから、まずシナリオを先に考える。例えば地球温暖化の結果、一体何が起きるのか。それが原因となって生じてくる問題あるいは現象というのが1つ考えられる。

もう一つは、温暖化の原因となる事象、現象、事態というのは何なのかという形で因果関係の鎖。そういう連鎖の構造をまず頭の中に描いてみて、その結果出てくる課題、問題はなにか。観測の問題、モニタリングの問題、データの分析の問題、人間の生き方に関する、あるいは経済構造、法律、制度、さまざまな問題がある。どういう領域・項目の研究が必要なのかと。

【宮本】 1番目の地球環境変動研究とか化学物質の総合管理研究というのは、科学技術として将来にわたって何をやっていくのかというのは、かなりはっきりできる。

循環型社会構築研究だとか自然共生型社会構築研究。これは違う。標準物質、計測技術、環境生物資源保存等の知的基盤の整備。知的基盤の整備のエグザンプルとしてこの3つを並べるのは必ずしも適当ではない。

【渡邊参事官】 差し迫った14年度、どうするかという問題が我々のところに課せられてきている。14年度に関してはここを重点的にやろうというゴールが見えるような形にする必要。それから、体制の問題は当然ある。少なくともこの4つぐらいの領域で、こんな事例を与えて、シナリオ駆動型の統合化プログラムというもので重点化したということまで出せば、各省がそれを受けて、そういう形の予算要求ということは十分あり得る。

【吉川リーダー】 観測の話と、化学物質処理といったような生産という立場がある。

1950年代から、国際地球年などが始まって、地球の基礎科学者が研究してきた。1980年代にサステナブル・ディベロップメントという概念が出てくる。地球研究は、例えばICSUのIGBPのように目的意識を持って、環境劣化という観点で地球観測が行われた。IGBPができて、ヒューマンディメンションというプログラムができ、さらに最近になって多様性という概念ができる。明らかに観測という意味ではどんどん進んでいる。

その一方の流れで、1987年にサステナブル・ディベロップメントという概念ができる。その後、リオ会議が92年であって、それからIPCCができて、COP、そしてリオプラス10。

ところが、大問題が今起こっている。それは何かというと、観測はどんどん進む。一方、COPで炭酸ガスの規制を国際政治でやろうというと、それがうまくいかない。データはある。しかし、政治的に解決しない。これが先ほど植田先生のおっしゃったサステナブル・ディベロップメントというものが解けない、人類に突きつけられた大きな課題なんだと、こういう話がもう目前にある。

環境問題はこのことを抜きにして議論できない。そこで、カテゴライゼーションの話になるが、結局そういった国連がずっとやってきた環境問題と、それから科学者たちがやってきた環境観測問題が、両方随分いろいろなことを明らかにしたんだけど、これを人間行動として解決できない。その中で、科学技術として何をするのか。

そのやり方はいくつもある。地球環境の観測を制度化していく。あるいは人間の生産行動に中心を向けて、その問題で問題解決を図ってみよう。これは、いわば特定課題について、少なくともその特定課題1つ解決できなければ、全部解決できないのは自明ですから、少なくとも特定課題を限定して、その課題を解決しよう。

これが、実はここに書いてある地球環境研究と有害化学物質研究。地球環境研究というのは、これは特定課題を観測という課題からより詰めてみようということ。有害化学物質というのは、物質生産という観点から、それを何とか解決できるだろうかというカテゴリー。その次の循環型社会構築研究というのは、物質循環に観点を置いた人間活動の整理であり、物質循環という形から人間活動のシナリオを書くことができるのかという問題提起。自然共生型というのは、人間のライフスタイル、経済・社会システムを全部含めた、1つの人間システムを含めたシナリオを描く。したがって、この4つのカテゴリーは、いくつもの軸がある。軸ごとに切ってみた結果、切り出されるテーマという意味での重点課題。これは平面上の重点課題じゃなくて、実験計画法と同じで多次元の中で出てくる複数のテーマ。

【茅】 ここに書いてあるタイトルは例えば従来の省庁の研究の分類とかに使われていて、簡単に変えられないものか、あるいは自由に決めていいものなのか。

【渡邊参事官】 地球環境研究、循環型社会構築の話、有害化学物質というのは、科学技術基本計画の環境分野の中の用語。ただ、地球環境を地球環境変動に直すなどは可能。有害化学物質は、有害な化学物質。化学物質だけでもいい。

【石井】 この4つというのは、重点化するときの4つの柱。領域じゃない。だから、まさにこれこそが重点化のクライテリア。ですから、1ページ目の表の重点となるべき領域をそっくり上へ持っていった方がわかりやすい。下には、その切り口でさまざまなフェーズの研究すべき項目。

【小池】 こういう4つの切り口で環境の問題を考えるということをここで言えば、それで十分。それぞれの切り口でシナリオ駆動型の統合的なプログラムをこれから創設する。むしろ大事なのは各省庁がそれぞれの役割を統合して、政府全体としてシナリオ駆動型の統一プログラムをつくるということが、ここでの一番のメッセージ。

【茅】 エネルギーのワーキンググループでは、重点化の考え方では、どういうものを重要と考えるかということを書いた。重点化の領域で、ここにあるような項目を挙げた。

【石井】 社会基盤で重点化の考え方のクライテリアとして並べたのは、安全の構築。それから、国土の再生と成熟型社会生活の基盤形成。3番目が国際貢献。上の2つに比較的近い切り口が、この地球環境とか循環型。

【渡邊参事官】 既に重点化の考え方に、この重点となるべき領域等に示したことは書いてある。

【吉川リーダー】 個別課題の解決というテーマのつくり方と、それから社会構築みたいにトータルにあらゆるものをシステムとしてデザインしてみるというアプローチは、研究として違う種類。

【松野】 環境問題を解決というのは、問題ドリブン。共生と循環の基調は、目標ドリブン。問題ドリブンのほうで、地球環境変動という非常にスケールの大きな自然と区別のつきにくいようなもの。有害化学物質という、非常にはっきりした問題。循環型というのは、サステナブルワールドをつくるという目的。自然共生型は、そんなに大きくないスケールでマネージできるような範囲での共生を目標につくっていく。

【吉川リーダー】 地球環境研究というのは、観測だけでいいか？

【松野】 その先のことは考え方が大変難しくなってくる。問題からずっと分析して、次に対策という段階で、そのところは例えばエネルギーまで関連する。これはとても大きくなるので、その切れ目をどう考えるか。

【吉川リーダー】 観測は絶対欠かせない。けれども、観測してからでは手おくれになるので、行動は行動で並行して起きる。しかし、この1番は観測で、3番が物質管理。逆に2番目、循環型というのは物質循環の制御。4番目は、いわばライフスタイルを含む社会の制御。上の2つの順番を変えなければいけないが、変動観測と物質生産管理、物質循環制御とライフスタイル制御。

【西岡】 我々はギガトンの氾濫と言っているんが、量でもって全体の社会がおかしくなっている。一方、有害化学物質のように、ppmの氾濫。非常に細かい質的な問題。最後は、もう少し自然と親しむ生活をしたい。

重点化の考え方のところ、3つ項目を設ける。1つは今現在、解決が要求されている問題がある。2つ目が、環境は、トップダウンでイニシアティブをちゃんとつくっていかなくちゃいけない。3つ目が、そのアウトプットというのはどういう役目を持つべきか。

それから、この重点となるべき領域・項目。これについては、少なくとも後ろの紙には、こういったプログラムもあるが、そのうちのこれを選ぶということをここにきちんと書く。

現状の行政的政策の必要はあまりない。むしろ、CO₂を何ppmにしなければならないのか。なぜそうなのか。影響がどれだけか。それを防ぐためには、こういった4つの大きな疑問があって、それに結びつけるような項目をピックアップし、さらに細かいプロジェクトまで行く。

【茅】 4領域だが、「科学技術基本計画にも盛り込まれている」という名前のほうが、はるかにまとも。

【宮本】 この重点となるべき領域・項目で、循環型社会とか自然共生型社会構築研究は重点化された言い方ではない。一方、地球環境変動研究、化学物質の総合管理の研究は具体的に提案されている。そういう意味で整合性が悪いというところから、先ほど来、議論が始まっている。循環型と自然共生型をもう少しかみ砕いて、ある程度プログラムが入ってくるような表現に変えるとよい。

【河野】 環境問題の難しさは、短期的対症療法的な取り組みだけでは不十分で、長期的視点が必要。中長期的にどういうふうに取り組んで行くかについても、盛り込んでいくことが大事。

【山口企画官】 ここに書かれているのはあくまで例示。これから各省庁のヒアリングをふまえて議論していただき、また絞り込む。

【吉川リーダー】 重点化の考え方の中に、方法論を書いたほうが良いという提案がたくさんあった。その中で例えば観測予測という視点から大事になってくる課題。管理という観点から重要になってくる課題。何か新しく構築というか、デザインするという観点から重要になってくる課題。そういう全然違うカテゴリーのものがあるということを書き込む。そうすると、先ほど来どうもこの4つが切り口がことなるのではないかというのは、一応カバーする。そうした上で、下の4つは地球環境研究では、何だかわからないということ。変動予測、変動観測の1つのカテゴリーから出てくるもの、2番目に物質管理というもので出てくるもの、3番目が構築研究だというふうにすれば、重点化の考え方から、一応環境における領域みたいなものが見えてくる。

【渡邊参事官】 地球環境を予測観測だけにとじ込めるというわけにはいかない。予測以外に、その変動した影響がどうなのか、対策はどうなのかという問題もある。

【吉川リーダー】 みんな入らなきゃいけないのか。

【渡邊参事官】 地球環境に関しては、構築という概念は薄いと思うが、観測、影響、対策ぐらいまでは入る。

【吉川リーダー】 しかし、これは、皆重なる。領域を、直断に分けたわけではなく、地球環境研究と有害化学物質研究の共通部分が多量にあり、その中にプログラムが入ってくるというのは非常に考えにくい。

これは領域ではなく、視点とか見方。重点となるべき領域・項目だと思って一生懸命読んでいるから、読みにくい。領域というのは、ほかを排除して、何かを抽出すること。従って、地球環境でも全部入る、循環型社会でも全部入るといえるのは、むしろ視点である。

【秋元】 今言われたワーディングは、ほとんどこの資料1の4ページのところから5ページに向けて書いてある。例えば、地球環境研究では、今の自然生態系に係わる地球変動の予測、これは観測としてもいい。社会経済等への影響並びに地球温暖化対策と書いてある。ここで、今まで先生が言ったワーディングは全部入っているわけだし、それから自然共生型というのも、豊かな水と生物、きれいな空気にかこまれた自然共生型社会の実現にむけた研究だと言え、かなりわかる。だから、これをもう少し整理した形で、おのおのの項目について説明を書けば、どういう格好で重点化していくのかわかる。

【浦嶋審議官】 エネルギー、環境は、学問領域とか、分野とか、ある1つの技術とか、何か他を排除した書き方は容易ではない。例えば地球環境研究と言っても、大気圏流動の物理学の話から種々の技術まで入っているとすれば、それを1つの領域的な言葉で語ることはなかなか難しい。政策目的、目標のようなものでしか書きようがない。そのため左側の領域という言葉と矛盾が生じてくる。このような環境分野の特性のために、こういう系統の言葉で整理することを認めていただきたい。

【吉川リーダー】 確かに領域で書きにくい、ある意味では領域で切り出してはいけない。しかし、重点化の考え方にも書いてある。「政策目標とその解決にあたる道筋を設定した、幅広いシナリオ駆動」と書いてあるので、それはここでわかった。さて、それを受けて、これがシナリオドリブンの領域だというわけか、この下の4つが。そういう意味なのか。

【浦嶋審議官】 地球環境という中においてはパートになっている部分から始めようというのは十分あり得る。と

というのは、あまりにも最初から大風呂敷を広げて、人数を多くやると、マネジメントがほんとにできるのという議論もある。それぞれのプログラムに、どれぐらいのパーティシパントが要るのかということ自体も、まだ検証できてない。したがって、そのくり方は、当面変動要因の観測でくってみようというのもあり得るが、それはテクニックの問題というか、順番とかプログラム、これからの持っていき方が何が一番賢いかということ。環境の研究というのはいろいろな分野がもちろんあるが、こういった4つのところを切り口にしつつ、具体的なプログラムについては、もう少しよく検証してみようということで、とりあえず例示になっている。

【吉川リーダー】 いいのだが、要するに違いがわからない。例えば地球環境を地球環境変動の総合的観測と言え、それは1つの研究態度が見えてくる。しかし、地球環境研究のみでは、何も言っていないのに等しい。循環型社会構築研究は意味がある。循環型社会構築研究は、当然、地球環境研究の1つである。そういう意味で、非常にわかりにくくしている。実際、今、研究者が一番多いのは観測研究者、実績もある。浦嶋さんの話のようにばらばらだとすれば、それを総合的にやろうということであろう。例えば地球環境変動総合観測研究とか言えば、これはある種の我々の行動シナリオを書いていることになる。

【渡邊参事官】 今の発言、審議官の話とも、おそらくプログラムのほうのレベルで考えるようなカテゴリー。循環型は、廃棄物のリデュース、リユース、リサイクルというところに視点を当てた話で、地球環境は変動予測、影響、対策。有害化学では、化学物質のリスクの極小化、評価、管理というところに視点。自然共生は、水循環と生物多様性、生態系保全というところに視点を置いた柱。スペースの問題で説明を書けないので、上のキーワードだけを入れてきた。この地球環境の予測のための観測のほうで行くのだというなら、実は例のほうで地球環境変動予測のためのモニタリングのプログラムとか、そういう範疇になるのではないか。

【石井】 極めて実務的な観点から申すと、こういうものがあるメッセージとして総合科学技術会議から出されたときに、各省庁はたぶん何でもありということになってしまう。これは、つまり我々がこの仕事をやっていることの役割を果たさないことになりやしないか。

【佐々木】 やはり地球環境研究というと全部絡むので、少なくとも変動か何か言葉を1つ入れたほうがいい。ずっと見ていると、最後の4つ目は私たちから見ると研究の場所が見える。一番最初のは地球全体のことを見ているし、2番目のは一般論というか、それで何か方法を見つけていきたいという感じがある、そういう意味ではそれぞれ違った面が見えてきているのか。

【茅】 私もやはり言葉が舌足らずだと思う。もう少しはっきりした言葉に変えて、例示のところは、4つ書くのではなく、せいぜい1つか2つぐらいにしておくのがいいのではないか。

【吉川リーダー】 今、茅先生がまとめたように、この4つを、先ほど来、秋元さんもたびたび言っていることだが、4ページにあるような表現に改めて構わないか。

【渡邊参事官】 はい。

【吉川リーダー】 それでは、そうしよう。それで、例示としては、地球温暖化——防止がいいかどうかは別として、これは非常に限定的になっている。自然共生型流域圏再生プログラムも限定的になっているが、これは例示としては十分あり得る。

【小池】 上の4つは地球環境変動を入れれば、それでいい。例示の仕方で、後についているものは中身を限定している。これが反映されるような課題を入れていけばいい。それぞれ2行の説明があるが、それでキーワードが出ていて、2つか3つの課題になっている。これが事務局として重点的にやってほしい課題に相当している。

5ページに、それぞれ循環型、自然共生型、かなり具体的にこの中身を書き込んでいる。これがそれぞれのところで、このキーワードをとって課題にするか、あるいは先ほど出たように、全部を書かないで、2つぐらいの例でしてしまうか。どちらでもいい。4つの重点項目というのは、どちらかというとも全部を含んでしまっていて、何でもありになってしまう。だから、その中で何年間かは重点的にやるものはなにかというメッセージを出す。

【植田】 私も全く同じ意見。4つをそのまま並べるのが基本だと思うが、その上で具体的な内容が対応する。例えば、循環型社会構築プログラムだと重なってしまうが、循環型都市デザインプログラムにすれば、趣旨としてもシステムデザインをするという内容が明確になるので、はっきりする。

【浦嶋審議官】 いずれにしても、統合化プログラムというものの範囲の限定が必要。この4つを掲げれば、およそ環境の研究というのは全部どこかに登録できる。きょうの6ページの「★」に「統合化プログラムの範囲については、各府省との協議も踏まえて検討が必要」と書いてあり、ここできょうの段階で決め切ることはできない。1カ月ぐらいの幅の中でヒアリングなどを重ねたり、意見交換しながら、もう少しコンセプトをクリアにしていき、何でもありではなくて、範囲を絞っていきたいと思っている。

【吉川リーダー】 それはいいのだが、少なくともこの資料1の範囲内で理解可能にしておくためには、いくつかの例示があったほうがいいわけであろう。それは、先ほどのようなのはいけないのか。

【浦嶋審議官】 結構です。

【茅】 確認だが、この書き方で例として1つだけ出して、ここにあるような説明も同時に入れる。そうすれば、単なる例示という意味にもなる。

【石井】 長く書かなくて、ごみゼロ都市とだけ言ってもいい。要するに、重点化の考え方で書いてあることをここに当てはめると、こういうふうになるのだと。

【秋元】 今のごみゼロ都市を例示に持ってくるのは、ちょっと心配なところがある。ごみをゼロにするためには、エネルギーをいくらでも使ってもいいという話になると、これは困る。やはりエネルギー的にも最適な形で、循環型をやっていかなければいけないので、どれをとるか、表現ぶりも慎重に議論する必要がある。

【吉川リーダー】 分野の状況はこれでよい。重点化の考え方については、さっきの観測、管理といったようなものを入れるか。任せていただけるか。カテゴリゼーションの難しさというのが環境研究の非常に大きな特徴であるということを一言触れておいたほうがいい。

重点となるべき項目については、4ページの非常に上手に書かれた柱をここに書いて、例示としては1つ、これも任せていただけないか。どれか1つ書いて、ただし説明もつけるということで、結局、例示と説明を読むと、なるほどその重点化の考え方から、領域という概念がここに出てきて、そして例示にずっと1つの流れができるということで、この1枚を読めばある程度のことがわかると、こういう構成にするということで認めていただければ、あしたの説明を石井先生にお願いします。

【松野】 重点化の考え方については、あまり変更しないという話だったのか。

【吉川リーダー】 環境研究のカテゴリというのは、観測予測研究とか管理研究とか、何かデザインする研究とか、いくつかあって、それは同時並行的に進めるべきだというようなイメージをどこかに入れたほうがいいのではないかと。観測も重要だ。

【松野】 それぞれが頭の中で考えて、こういう4つの目標を重点というのは、結論としてはいい。しかしどういう基準でセレクトしたのかがわかりづらい。その意味で、環境研究におけるカテゴリゼーションの難しさ、特有のカテゴリゼーションをしたんだということが入っていると、わかりやすくなる。

【吉川リーダー】 考え方の中に触れるというようなことでやれるかと思う。

2. その他

【浦嶋審議官】 6月中には推進戦略を作らなければならない。その推進戦略を見て、すぐそれが生きるかどうかは全体の中での議論によるが、各省がそれを見て予算要求していく。そういった予算要求の状況を、こちらも傍目で見ながら、年末に全体を統合した推進戦略として改定する。従って、5月から6月にかけて、この会合を2回ぐらいやり、その間に場合によっては省庁ヒアリングなどを入れて、これを具体化していく。このプロジェクトは、

少なくともワンラウンドとしては、年末まで続く。そこで1年分としては一段落する。

【山口企画官】 次回の会合、第4回目は、6月5日火曜日の13時から17時に九段会館で予定。

第2回の議事要旨の修正については5月31日までに事務局まで連絡。その後、議事要旨を公開。

【渡邊参事官】 今回は、4つの柱をもとに、各省に統合化プログラムに関する提案をしていただき、議論する。

以上